『トムは真夜中の庭で』の構造分析

Structure Analysis of *Tom's Midnight Garden*

林　正雄
Masao HAYASHI

（平成18年10月2日受理）

Abstract

This narrative is considered one of the most popular English literary works for young adults. It shows us the illusionary garden where Tom and Hatty create a heartwarming children's world. Different from the usual fantasy literature, this narrative is very persuasive in its time structure and succeeds in producing a realistic impression.

This narrative tries to seek out the strangeness of a sense of time with the support of subtle psychological movements of the characters and also with the appropriate allusions to the Bible. It should not be treated as 'Juvenile literature,' but rather as 'literature for young adults.' Kenzaburou O'oe wrote an article for Asahi News Paper on *Tom's Midnight Garden.* He recalled that he was deeply attracted by this real as well as dreaming narrative.

In this paper, some practical ways are shown to make use of this narrative for teaching materials of English conversation at secondary schools. In my class, students are assigned to make proper conversation scripts based on the episodes in this narrative. Tom's kind character and his charitable consideration for Hatty can be proper resource for making conversation scripts with warm consideration for others, particularly in the age when the principle of merit promotion is being prevalent.

はじめに

イギリス青少年文学の最高峰の一つとみなされているこの物語は、通常の時間的制限を越えて、過去に存在した庭園にタイムスリップして、トムとハティーが互いの孤独さを慰めあって子供の世界を展開する、というものである。どんな状況でも可能になる単なるファンタジーとは違って、この時間を遡るファンタジーは緻密に構成されていて、大団円の段階で明らかになるタイムスリップの謎は、それなりの説得力をもち、リアルな感動をもたらすものである。

人間が感じとる時間の不思議さについて探求しているこの物語は、作中人物の心の動きや、聖書の記述を踏まえた作品構成などが相当に複雑であり、児童文学とは言いがたい。日本語としてはあまりこなれてはいないが、青少年文学というべきであろう。英語では、'literature written for young adults' などの表現を用いている。

なお、本稿執筆中の平成18年9月19日の朝日新聞の朝刊（31面）に、大江健三郎氏による記事が掲載

された。その中で氏は、『トムは真夜中の庭で』を取り上げて、「私は、少年トムが親戚の住む大きな屋敷の中で真夜中に経験する、夢のようでいながらリアルな物語に引き付けられました。」と述べている。

本稿では、教育学部における教材研究及び教材利用のための便宜を考えて、この物語の単なる作品紹介と解説に留まらずに、中学・高校生の情操教育を目的とした教材化の方法を提示した。作中人物の優しい心遣いの会話を取り上げることで、その心情を取り込むことができるのではないかという想定によるものである。

1．トムの二つの人格

トムの周辺で麻疹が流行り始めたので、母親のロング夫人はトムを叔母のグウェン夫妻の家に隔離することにする。グウェン夫妻はカースルフォード周辺のアパートに住んでいる。

このアパートは、昔は一軒の大きな家で広い車道のある広壮な邸宅で、広い庭と牧場が広がっていた。今では小さな家がひしめき合っている。柱構えの玄関は、かつての広壮な邸宅を偲ばせている。誰も掃除をしない古い家には、埃の臭い（a smell of old dust, 4）が漂っている。アパートのホールには古時計がある。その大時計は、正確な時を刻んでいるが、時報の音はでたらめである。[i]

この家は、過去と現在の対比を表現していると同時に、過去と現在が同居している場である。過去が現実として出現するのは、この世の3次元世界を超越した別世界である。それは真夜中の13時を告げる古時計の合図を待って出現する。古時計の文字盤の上には、翼を持った人間のような存在の装飾が施されている。[ii]

トムが案内された寝室では、赤ん坊が窓から落ちないように、窓の下部に横木が渡されている。育児室（nursery）をあてがわれて「赤ん坊」扱いされたと誤解したトムは憤慨する。[iii] トムにとってはこれまでに無い経験であるが、はなかなか寝付くことができない。うたたねしながらトムは二つの人格に分裂する。

Sometimes he would doze, and then, in his half-dreaming, he became two persons, and one of him would not go to sleep but selfishly insisted on keeping the other awake ... . (10)[iv]

トムの二つの人格とは、バーソロミュー夫人の夢の中に入って別世界としての庭の中でハティーに出会う生気に満ちた生き生きとした人格と、おばさん夫婦のアパートで、「赤ん坊」扱いされて本来の自己を理解してもらえない、満たされない人格である。満たされない人格は、充足を求めて、「庭のトム」を生み出す。「庭のトム」は真夜中の13時に出現する、別世界の、夢の世界の人格である。

同様な人格の分裂はバーソロミュー夫人においても起きる。トムがキットソン夫婦に預けられたころから、バーソロミュー夫人はしきりにバートと結婚する前の、ハティーと名乗っていた幼年時代の夢を見る。ハティーは両親と死に別れ、慈善施設に預けられたが、おじさん夫婦に引き取られたのである。頼りのおじさんも死んでしまって、ハティーは心の冷たい義理のおばさんの家で辛い日々を送っている。幻想の庭を生み出したのは、単にバーソロミュー夫人だけではなく、トム自身の願望によるものでもある。

トムとハティーは同じような心細い境遇におかれていたのであり、バーソロミュー夫人の夢のなかにトムの夢想が入り込んでゆくという形で、二人が出会うことになったのである。トムとハティーが遊び戯れる真夜中の庭を生み出し

たのは、ともに遊び相手を求める渇望（longing）であった。

2．庭の出現

児童文学や青年文学の特質のひとつとして、登場人物の心理描写は押さえられて、夥しい数のエピソードが続く点が観察される。次から次へとエピソードを語ることで児童の興味を維持するねらいがある。主だったエピソードを追ってゆくと次のようになる。

夜になってトムは、なかなか寝付けないでいる。大時計が13時を打ったことに気づいたとき、それが何を意味しているか理解できない。

Thirteen! Proclaimed the clock, and then stopped striking.

Thirteen? Tom's mind gave a jerk: had it really struck thirteen? Even mad old clocks never struck that. He must have imagined it. Had he not been falling asleep, or already sleeping? But no, awake or dozing, he had counted up to thirteen. He was sure of it. (15)

やがてトムは自己変容の内的体験を感じる。すると周囲の世界が生気を帯びていることに気づく。周囲の静寂さは、何か事が起きることを予告している。屋敷は生きている。13時を打つ意味を理解できないトムを訝っているかのようである。

He was uneasy in the knowledge that this happening made some difference to him: he could feel that in his bones. The stillness had become an expectant[v] one; the house seemed to hold its breath; the darkness pressed up to him, pressing him with a question: Come on, Tom, the clock has struck thirteen-what are you going to do about it? (15)

眠くてたまらないトムを眠らそうとしないもう一人のトムは、別な時間があることを断言（affirm, 15）する。

通常の感覚では捉えられない、現実の世界のなかに暗示される別世界への入り口を提示しようとする試み－これがこの物語の主要テーマのひとつとなっている。

13時を打った大時計が何を意味するのか訝りながら、トムは文字盤を読むために階下に降りてゆく。月の光を入れて文字盤を読もうとして裏庭のドアを開けると、叔父さんの説明とは違って、裏庭には広い庭園が広がっている。[vi]

花が咲き乱れている花壇のある広い芝生が広がっている。背の高いモミの木が一本、そしてイチイの木が数本植えられている。右手には大きな温室がある。庭の隅からは小径が走っていて、曲がりくねりながら庭の奥へと続いている。

翌日にこの庭についてよく調べようと決心して建物の中に戻ると、あたりの様子が一変している。小走りにとおり過ぎていった女中さんはトムの存在に気づいていないかのようである。この新世界は、ほどなく消え去る。

これがトムにとっての別世界の初体験である。トムの姿を認識できない世界に入り込んだトムは、一種の透明人間の立場に立つことになる。

翌朝裏のドアを開いて確かめると、邸宅の裏に庭はなく、舗装された狭い空き地になっている。庭が消えてしまったことを知って泣き出すトムをみて赤髭の男が訝る。

バーソロミュー夫人が大時計のネジを巻く姿をみながら、二つの世界に存在するイチイの老木と大時計が、昨夜と今朝をつなぐ結び目であることに気づく。イチイの老木は今では塀のむこうの隣の空き地に立っていて、二つの世界の関連性と相違性を暗示している。前夜の不思議な体験をトムはピーターに書き送る。

別世界への入り口は裏庭に通じるドアのボルトであるが、現実の世界ではイェール錠に変わっ

ている。

真夜中になって大時計が13時を打ち始めると裏庭のドアのボルトはすんなりと開くのである。狂ったように打ち続ける時計に、アラン叔父さんは眠れなくて苛立つが、大時計の所有者のバーソロミュー夫人は子供の頃の情景を夢見て、安らかな寝息をたてて眠っている。[vii]

この描写には、年老いたバーソロミュー夫人が幼いころのハティーに変容する過程を予感させるものがある。古時計はその変容を喜び迎えるかのようにでたらめに時を打ち続ける。

トムが庭でどんなに長く過ごそうとも、台所の時計はその時間を記録していない。トムが庭で過ごす時間と台所の時計の時間とは別次元の時間である。古時計が13時を打つ理由はそこにある。12時を打った後の時間は通常の時間ではない。一時間が60分でくくられる時間ではなくて、永遠なのである。

However long a time he spent in the garden, the kitchen clock measured none of it. He spent time there, without spending a fraction of a second of ordinary time. That was perhaps what the grandfather clock had meant by striking a thirteenth hour: the hours after the twelfth do not exist in ordinary Time; they are not bound by the laws of ordinary Time; they are not over in sixty ordinary minutes; they are endless. (181)

3．庭の時間

この物語には、人間における「時間」のありようを考えさせる描写が随所に見受けられる。作中の描写から考えられる時間を種類分けすると、次のようになる。

- トムの現実の時間
- 庭にいるときのトムの時間.
- 庭にいるときのハティーの時間
- バーソロミュー夫人の生きた過去の時代の時間
- バーソロミュー夫人の夢の時間
- バーソロミュー夫人の記憶の時間

上記のさまざまな時間の間には、ズレが見られる。その事を端的に示す描写の例が、モミの木が倒壊する場面の描写である。この描写はトムの視点からのものとハティーの視点からのものとの二重の描写がなされている。

モミの木倒壊の体験はトムにとっては別世界の庭を知ってから、間もないころの体験である。ところが、ハティー（＝バーソロミュー夫人）にとってこの体験はトムを最後に見たときの出来事である。このズレによって読者は時間系列に混乱をきたす。トムの体験は時間軸に沿ったものと思っていた読者は、実はそうではなくてランダムなものであったことを最後に知って、トム自身と同様に驚かされる。

モミの木復元の庭体験をしたあとで、トムは自分なりの時間観を模索する。その結果得られた結論は次のようなものである。

人はそれぞれの時間を持っている。それらは万人共通の大きな時間の中に組み込まれてはいるが、人それぞれの時間系列がある。そして何らかのきっかけがあると、人はすっと昔の他人の時間系列に入り込むことがある。

'You might say that different people have different times, although of course, they're really all bits of the same big Time.'

'Well,' said his uncle, 'one could say more accurately-'

Tom went straight on. 'So that I might be able, for some reason, to step back into someone else's Time, in the Past; or, if you like'-he saw it all, suddenly and for the first time, from Hatty's point of view-'she might step forward into my Time, which

would seem the Future to her, although to me it seems the Present.' (172)

トムは毎晩庭に行くのであるが、ハティーにとってトムは何ヶ月も姿を現さない。トムの現実の時間とハティーの庭の時間のずれは次のような会話によってさりげなく暗示される。ハティーにはトムが一度姿を現したあと何ヶ月も姿を現さないのであるが、トムはハティーに会うために毎晩庭に来ているのである。

'I shall see you tomorrow,' said Tom.

Hatty smiled. 'You always say that, and then it's often months and months before you come again.

'I come every night,' said Tom. (151)

ハティーと共に遊ぶ世界がトムの夢の世界であることは18章で具体的に示される。怪我をしたハティーの見舞いに訪れたトムは、ハティーのベッドのそばで、床にうずくまり眠り込んでしまう。目を覚ますと、自分のベッドで寝ている。虚構の中の夢の世界であり、虚構の構造は入れ子状に二重構造となっている。

4．庭の象徴的意味

庭は象徴的にさまざまな意味を内包することがある。そうしたものには、耕作作業、豊饒、女性らしさ、幸福、救済、純真さ、人間の身体、顔、天空、魂、世界、国家、余暇、神秘的恍惚感、瞑想、森と対象化された秩序ある自然としての意識、などであり夥しい意味世界を含んでいる。[viii]

そのような豊かな象徴世界を土台にしている『トムは真夜中の庭で』は、庭のさまざまな原型的イメージを含んでいる。しかしこの作品は、優れた文学作品が押し並べてそう言えるのであるが、伝統的な原型を踏襲するだけではなく、新たなニュアンスを生み出している。

読者がこの物語にアダムとイーヴの「エデンの園」のイメージを読み込んでも、不思議なことではない。単純に考えれば、アダムとイーヴはトムとハティーに置き換えて読んでいけるはずである。

ハティーは両親を失った悲しみに陰りを持つものの、彼女はトムと一緒に現代風に翻案されたアダムとイーヴとしての無垢なる世界を作り上げていると考えることができる。

しかしアベルにとってトムは別世界から忍び込んできた悪魔であり、ハティーが怪我をする原因を作る。トムはアベルによって地獄から来た悪魔という扱いをされている。

ひびの入った枝にトムが乗っても折れないことを知って、ハティーも同じ木に登るが、形態だけの存在であるトムと違って体重のあるハティーの乗った枝は折れて、彼女は木から落ちる。トムは「猫よりも身軽に」(more weightless than a cat, 131) 地上に降りる。

怪我をしたハティーを抱えながら、アベルは、「おまえが出てきた地獄へ帰れ」('Go back to Hell, where you come from!' 131) と叫ぶ。

子供の遊びと思える弓矢作りや、ナイフ遊び、そして木登りもアベルには悪魔の仕業 (your devilry, 131) と思えたのである。

'You've tried to kill her often enough — her that had neither mother nor father nor home here—nothing but her innocence, against your devilry with bow and arrows and knives and high places.' '... May the Lord keep me from all the works of the Devil, that he hurts me not.' (131-132)

バイブルのエデンの園の描写を原型としている読者には、ハティーの庭とエデンの園との間に断片的な類比・類推がなされる。しかし、エデンの園における、アダム：イーヴ：セイタンの関係は、エイベル：ハティー：トムの関係に類推することができる。トムには、タイムスリッ

プによって異界より進入してきた現代的セイタンのイメージが重ねられている。

ハティーは「リンゴの木」から落ちて怪我を負う。その直接のきっかけを作ったのは、形態だけの存在で体重の無いトムである。「智恵の木の実」を食べて堕ちたとされるイーヴとハティーとの類比は紛れも無い。トムがイーヴを堕としたと考えるときに、トムとセイタンの類似性は明らかになる。

ところで、『楽園喪失』は人間誕生の説明譚(etiological myth)であり、人間はいかにして誕生し、なぜ額に汗して働き、なぜ衣をまとっているのかを説明している。アダムとイーヴは智恵の木の実を食べて理性に目覚めたからこそ人間として誕生したのである。

怪我をしてベッドで寝ているハティーを見舞うトムは、ハティーの話し方の中に、トムは子供だけれど自分はもう子供ではないと考えている調子があることを認める。[ix]「リンゴの木から落ちて」怪我をした経験の後にハティーは、一回り大きく成長するのである。庭園はハティーの成長を止める力があることが暗示されている。[x]ハティーは結婚を契機として庭園のことを忘れてしまう。[xi] こうした意味で庭園は、囲われた場所であり、何者かの庇護を受けている場所でもあり、したがって象徴的に親の庇護を受けている幼年時代を意味するものであり、神の庇護を受けているアダムとイーヴの住んでいたエデンの園を原型としているということができる。

トムがセイタンだとすると、これはなんともかわいらしいセイタンである。ミルトンの描くセイタンもあれば、ピアースの描くセイタンもある、ということである。このように比較してみると、宗教的イメージは文学体験の内容によって大きな違いを見せるものでありうる事がわかる。少年期にピアースのセイタンに触れた読者は、必要以上に苛烈な宗教的善悪二分法的な思考方法から解放されるのではないだろうか。これが同じ原型に立ちながら、変異体(variants)としての作品が後世に生み出されてゆく理由なのである。[xii]

5.「もう時間がない」

トムは以前から気になっていた、古時計の文字盤に描かれた天使について調べる。おばさんが二階にいる間に、トムとハティーはおじいさんの古時計を調べる。チックタックと時を刻む振り子の一番下についている錘は金メッキがされていて、その上に "Time No Longer" と書いてある。本(巻物)を手にした天使が大きく足を広げているその足元には、「黙示録10章、1－6節」と書いてある。二人はアベルの聖書で、出典個所を調べる。

黙示録の象徴的表現が何を意味しているのか二人には理解できない。トムは「もう時間がない」ということばの意味が理解できなくて沈み込む。自分なりに時間に関する思索を深める。「もう時間がない」ということであるならば、すなわち世の終わりが来るということであるならば、「時間」は一時的なものに過ぎないのかもしれない。無くても済むものなのか、あるいは身をかわして避けることができるものではないかと思い迷う。できれば過去を、すなわちハティーの現在と庭の世界を永遠に自分のものにしたいと希求する。

Tom thought again: Time no longer-the angel on the grandfather clock had sworn it. But if Time is ever to end, that means that, here and now, Time itself is only a temporary thing. It can be dispensed with perhaps; or, rather, it can be dodged. Tom might be able to dodge behind Time's back and have the Past － that is, Hatty's Present and the garden － here, now and for ever. (168)

この引用から分かるようにトムはすでにハティー

の世界と庭の世界は過去の世界であり、自分はその過去の世界にタイムスリップしていることを自覚している。

このタイムスリップの時間をトムは、「100年以上前の、ハティーが生きていた時代」(Instead of going forward for twenty years, Tom went back a hundred and more, to Hatty's lifetime. 171) と考えている。とすると、「トムの現在」におけるバーソロミュー夫人は百数十歳の老人ということになるが、タイムスリップした時間は、80年前後と見るのが妥当であろう。[xiii]

いずれにしても、トムは夜毎のタイムスリップが、通常の時系列 (usual order) に沿ったものではないことを自覚している。雷にうたれてモミの木が倒壊した庭を見た次の夜に、モミの木がしっかりと立っている庭を見ることがあったり、大幅に異なった年齢のハティーに時系列を無視した形で会っていることに気づく。ついには、十年ほどの間のハティーの時間 (庭の時間) は、トムの夏休みの数週間に過ぎないことを理解するのである。

He did not always go back to exactly the same Time, every night; nor did he take Time in its usual order. The fir-tree, for instance: he had seen it standing, fallen and then standing again- it was still standing last night. He had seen Hatty as a girl of his own age, then as a much younger one, and recently as a girl who-although Tom would not yet fully admit it-was outgrowing him altogether. In flashes, Tom had seen Hatty's Time — the garden's Time — covering what must be about ten years, while his own Time achieved only the weeks of a summer holiday. (171)

ヨハネの黙示録第10章の記述は「七人の天使と災い」(8章6節-11章19節) について述べられた個所の一部である。[xiv] 第10章は第7のみ使いが現れる個所である。[xv] "there should be time no longer" (「もう時間が無い」)、あるいは "There shall be no more delay" 「もはや時が延ばされることは無い」と訳されているこの個所の本来の意味は、「神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する」までに「もう時間が無い」という意味である。しかしこのことばは、この物語ではより幅のある解釈が必要である。次に述べるように多義的な解釈が可能である。

ハティーが大人になってこの庭を出て行くまでに「もう時間が無い」、麻疹の流行が収まってトムがこの庭をあとにするまで「もう時間が無い」、庭の体験を踏まえてトムが1人の人間として成長して庭を後にするまでに「もう時間が無い」、等の意味に解釈することができる。

6. 情操教育のための教材化

犯罪の低年齢化が進んでいる。つい最近も、小学生による母親殺し事件が報道されて周囲の人々を慄然とさせた。さまざまな理由が考えられるが、近年社会全般に渡り当然のことのように導入されている欧米型の能力主義、優劣主義がストレス社会を生み出して、青少年の心を蝕んでいるように思われる。能力主義を補う形で、周囲を暖かく思いやる心を養う方策を用意すべきである。

18年度夏の集中講義「リーディング・スキル研究Ⅲ」の教材としてこの作品を扱った際に、優しいトムの人柄が描かれているこの物語を初等・中等教育の現場で教材化できないものかと考えた。

作品のプロット展開を追う中で、登場人物の優しい心遣いが現れている個所を選んで会話仕立てにするようにとの課題を与えた。ヒントとして、ハティーの王女気取りの場面を提示した。

自分はとらわれの王女であるというハティー

のことばに半信半疑でいるトムはある夜、両親に死に別れて、喪服の姿で蹲り、嘆き悲しんでいるハティーの姿を目にする。その姿を目撃されたことに気づかないハティーはその後も王女様を気取るのであるが、トムは決して彼女をからかうことが無いのである。

この場面を元にトムとハティーの会話形式にするようにとの課題を提示した。そして次のような台詞が学生によって作られた。

6－1．A. S. 脚色

・トムの優しさが表れるよう、トムとハティーの会話を作る

Hatty: Hi, Tom. I'm Princess Hatty.
Tom: Hi, princess. (With kissing her hand.)
Hatty: You said you didn't want to kiss my hand.
Tom: I changed my mind, Princess.
Hatty: Oh, really? So, would you play with me?
Tom: Of course, Princess.
Hatty: Why are you so kind today??
Tom: There is no reasons. Don't care. What do you want to do?
Hatty: Well, I want to go to the river!!
Tom: Ok, let's go.

今まではハティーが「自分はプリンセスだ」というと、父や母は王様なのか？どこの国なのだ？など聞いていたが、ハティーの家族の事情を知ってからは、なんの反論もせずにハティーのお姫様ごっこに付き合うことで、トムは優しさを表した。

6－2．Y. I. 脚色

トムの優しさをうかがわせる会話文の作成。

Tom　'Why are you crying？'
Hatty　'…My mother,…My father,'
Tom　'…Don't cry, '
Hatty　'…'
Tom　'…Smile,…Hatty？'
Hatty　'…'
Tom　'…When you are crying, …I'll be sad too. '
Hatty　'…Sorry,'
Tom　'…Don't say "sorry" ！'
Hatty　'…Sorry, cousin！'

6－3．Y. O. 脚色

・Tom の優しさが表れるよう、Tom と Hatty の会話を作る。

Hatty: My father was King so I was Princess. I'm a royal person.
Tom: Great! To be sure, you are elegant. By the way, please show your garden and hiding-place more.
Hatty: O.K. However, before it, I'll talk to you about my parents' great story.
Tom: That sounds nice! However, we are in the garden now. So, at first, I want to explore here. After going home, please tell me your story.
Hatty: Good idea! Let's start our exploration!

Hatty は家柄や両親の話をしようとする。それに対し Tom は否定せず優しく紳士的に聞き入れながらも違う話題に展開しようとする、という設定にしました。

6－4．T. A. 脚色

トムの人間的な優しさをあらわしている会話

Hatty: I am a Princess.
Tom: Certainly you are beautiful like a Princess.
Hatty: Oh! You're kidding!
Tom: No kidding!
Hatty: .....Thank you.
Tom: You don't say so!
Hatty: Why?
Tom: Because everyone know you're

beautiful like a Princess.
Hatty: Oh! You're a nice guy.
Tom: Thank you! Princess, let's play with me in the garden!

7．学生の読後感

7－1．A. S. 君の感想

・トムの真夜中の庭を読んで

この物語は、本当に不思議な物語でした。祖父の時計が誘う魔法の不思議の世界は、今の私たちがとうてい体験することのない世界なので、とても興味がわきました。

私が一番強く感じたのは、情景描写がとても美しいことです。実際には見られない世界だけれど、頭の中にきれいな庭が思い浮かびました。

今現在は、このような過去に戻ってしまえるような異次元は発見されていませんが、いつかは見つかるかもしれません。

この前の講義で見たリサ・ランドール教授の5次元の発見は、驚くべきものだと思います。誰がこの大発見を予想できたでしょうか。科学技術の発展によって、いろんなことが発見されています。もしかしたら、タイムマシーンが発明され、トムのように日常的に過去にタイムスリップできる日も近いのかもしれません。

もう一つ感じたのは、夢の世界を望む子供ならではの純粋な心です。この作品を読んだとき、ピーターパンを思い出しました。ピーターパンの連れて行くネバーランドは子供だけが行ける夢のような世界です。このネバーランドでは、永遠に子供のままでいられます。

トムの真夜中の庭でも、大人になってしまうことへのとまどいのような気持ちがトムから感じ取れます。周りのみんなは、知らず知らずのうちに成長していくのです。子供の成長は、とても早いものだと本当に感じました。

本当に面白い物語でした。読んでよかったです。

7－2．A. S 君の感想

・全体的感想

わたしは日本語の『トムは真夜中の庭で』を中学生のときに読んだことがあったので、だいたいのあらすじは最初からわかっていましたが細かいところまでは覚えていなかったので、英文で呼んだ時に理解しきれない部分があって苦労しました。

この話では、時間がとてもキー・ワードになっていた。始めトムは同じ時間が流れている別の次元の世界へ行っているのだと思っていたが、物語を読んでいるうちにトムは過去へタイム・スリップしていることであったり、ランダムに違う時間へタイム・スリップしていたりしていておもしろかったです。トムが終始、「時間とは何か？」と考えているのが印象的です。自分も「時間とは何か？」なんて、真剣に考えたことなかったのでもし聞かれたなら答えられないと思いました。トムが何時間もHattyと遊んでいるのに、もとの世界に返ってくると時間はほとんどすすんでいなかった、というのがとても印象的でした。時間とは不思議なものなのだと思います。また、Hattyの視点から語られたラストもトムとは違った視点でおもしろかったです。今、生きている私たちも一人ひとり、別の視点で物事をみているのだなぁと改めて感じました。

また、Hatty の幼い頃に行って Hatty の家族について知ったあとからトムは Hatty に対して優しくなった。このときだけ、Hatty の幼い頃へとタイム・スリップしたのは、トムに Hatty の家族のことを知らせるためだったのではないか？と思う。

時間についてとても考えさせられる物語でした。

・気に入ったところ（ページ数）

P171 Now, thought Tom, wasn't he himself rather like Rip Van Whinkle in reverse, so to speak?～

トムが、自分がタイムスリップしているのでは

ないかと気づき始めたところ。
だんだん謎が解けてきてワクワクしました。
P151　'Very well,' said Hatty. She never asked where he would go.〜
トムは毎晩、Hatty に会いに行ったつもりなのに、Hatty にとっては何カ月おきにしか会いにきていないという二人の間の時間のたつ早さの違いがおもしろかった。
P216　A little later that morning Tom climbed up to Mrs. Bartholomew's flat and rang the front door bell.〜
いよいよすべての謎が Mrs. Bartholomew によって明らかになるところ。

物語の中での時間が、おもしろいくらいに時間どおりに並んでいくので今までの謎や不思議だったことがわかっていっておもしろいです。

7－3．S. K. 君の感想

・全体的感想

最初は庭で木が倒れたはずなのに翌日にはその木がなくなっているという不思議というよりも、一種の恐怖的なものを感じたが徐々に進むにつれ、現実には不可能な時間旅行のような内容になっていき面白く感じられるようになった。また、後にわかることで、ハティーという幽霊が出てくるがその幽霊の正体は現に生きているバーソロミューさんであるという、生きているのに幽霊という点も矛盾していて面白かった。

・気に入った箇所　ページ数　P219

バーソロミューさんがハティーと知ったときのトムとのやりとりが良かった。黒い瞳、動き、声の調子、笑い方を徐々に思い出し「あなたは本物の八ティーだ」とトムが言った瞬間が感動した。

7－4．M. M. 君の感想

Tom の時間の流れと、Hatty の時間の流れが違い、Tom は子どものままなのに、Hatty は大人になってしまい、逢えなくなってしまうというところが私にはすごく切なく感じると同時に考えさせられる所でもありました。時が経過し、子どもから大人に成長することによって失ってしまうものは、たくさんあることを改めて感じました。人はいつでも、何かを得る度に、自分が大切にしてきた何かを失う、としたらそれは悲しいことだけれど、歳を取る事に関しては、少し違うかもと思いました。老いることは決して悲しいことではなく、思い出や経験を蓄積していくことでもあるのだと思いました。

この物語は、児童文学作品であるけれど、幼少時代に読んだら分からなかっただろう、と思うことがたくさんありました。子どもにも、そして大人にも読んで欲しい物語だと思います。そして、何度も読みたい物語でした。

・気に入ったPage

P69　あっかんべぇ〜を Tom がすると、Hatty があっかんべぇをし返すところ。

P71　Hatty が Tom の存在を今気付いたのではなく、ずっと前から気付いていたのよ、という所。

P97　Hatty が王女でないことが分かっても、Tom が何も言わない所。

P219　You were Hatty— you are Hatty !

P221　全体的に。

7－5．K. H. 君の感想

本編でトムは弓と矢の作り方がわからないハティーに対して、教えてあげるといったような優しさをみせていた。しかしトムは、ハティーの秘密を探ろうと意地悪な質問を考えてハティーを困らせてやろうといつも考えているが、いざ庭にはいるとそのような悪だくみは忘れてしまう。そのようにトムの気持ちを純粋にしてあげるような不思議な力が庭にはあるからトムの優しさが本編でよくめにすることができるのではないかとおもった。

7－6．T. S. 君の感想

この話には様々な時間の流れがある。普通に時を流れる時間、そして祖父の時計、庭の時間。これらの時間が入り交じって不思議な世界を生み出している。そして途中から、トムの中での時間と、ハティーの中での時間の流れの速さが変わり、トムとハティーの間が徐々に離れていくところに寂しさ、切なさを感じ、かつファンタジーを感じる。そして、この物語りは時間の他に、自然も多く書かれている。事細かに書かれていてその情景が頭の中に浮かんでくる。温かい気持ちになる。しかしトムとハティーの関係が悪くなるにつれて自然も損われていく。

トムはハティーがお姫さまと言いだしたとき、ハティーを傷つけないようにしたり、両親を亡くして泣いているハティーに優しい声をかけたりと優しい人間像で描かれている。 この話は読むのに難しかった。庭の景色を書いているところは知らない単語ばかりだった。でもなんとなく読むことはできた。時間の流れの不思議なところや、夜の庭の神秘な感じ、トム、ハティー、最後の心あたたまるクライマックスなど子供も読むのが楽しいだろうと思った。個人的には、最後の章ですべてが1本の線につながるのが好き。しかし、普段から英語を読み慣れていない人にとっては少々長いと思われる。

まとめ

作者の Anne Phillipa Pearce は1920年に、イングランド、ケンブリッジシャーのグレイト・シェルフォードに生まれた。父親は製粉業を営んでいた。水車や、川遊び、魚釣りなどの幼年時代の体験は多くの作品の中で、描かれている。ケンブリッジ大学のガートン・カレッジで英語と歴史を修学したあと、公務員となり、その後BBC ラジオの脚本家や、プロデューサーとして勤務した。後にオックスフォード大学出版局の教育部門、ロンドンの Andre Deutsch 出版社の児童図書部門の編集者として勤務した。

トムとハティーの物語の主要テーマは次の引用に凝縮されている。

He had longed for someone to play with and for somewhere to play; and that great longing, beating about unhappily in the big house, must have made its entry into Mrs Bartholomew's dreaming mind and had brought back to her the little Hatty of long ago. Mrs Bartholomew had gone back in Time to when she was a girl, wanting to play in the garden; and Tom had been able to go back with her, to that same garden. (225)

ここで、遊び相手を求めるトムの魂は寂しさのあまり「羽ばたいて」バーソロミュー夫人の夢見る心(dreaming mind)に入り込んで行き、その心を彼女がハティーと呼ばれていた幼年時代にまで連れ戻したのである。この「羽ばたき渇望する心」は、ギリシャ神話のプシュケーの動きを連想させている。プシュケーは蝶の羽を持つ美少女であり、そのひらひらと飛んでゆく蝶の様子は、魂の動きを連想させるので Psyche—Psycho—Psychology が派生したとされている。

また long の語源は、距離、時間、程度が異常に長い (extending over a considerable time) 状態を表しており、心理的な状態を表す動詞として用いられた場合は、「希求する」('Long implies wishing for something with one's whole heart')[xvi] の意味になる。トムの姓名は Tom Long であり、long はこの物語のキーワードと考えられる。しかもその「相手を希求する心」は「羽ばたいて」バーソロミュー夫人の心に入り込んでゆく。

面白いことに和英辞典に当たると「憧れる」という日本語に当たる英語は、[yearn for, hanker for, long for] が例示されている。「憧れ」ということばは瞳 (目の穴) と同語源を持ち、「心にぽっかりと開いた穴」の意味で

ある。したがって「さまよい出る」、「思いこがれる」などの意味で使われる。'Long'－「憧れる」はともに、「満たされない思いを抱く魂が元来の居場所を抜け出して、魂の充足を求めてさ迷い歩く」の意味を持つ。

そのように考えるとこの物語は、寂しい境遇の中で出会いを求める二つの幼い魂が時空の制約を超えて出会い、二人が作りあげた幼年時代の庭の世界を描いたファンタジーといえる。

このような物語のテクストに十分親しんだ後で、その中の心温まる描写をもとに英会話スクリプトを作成することにより、文学教育および情操教育のための教材を製作することができる。

文末脚注

i The clock kept good time-but it seldom chose to strike the right hour. It was utterly unreliable in its striking, Uncle Alan said. ... the clock was wrong again in its striking － senselessly wrong. (6-8)

ii In the semicircular arch above the dial itself stood a creature like a man but with enormous, sweeping wings. (33)

iii 'There are bars across the bottom of the window!' he burst out. 'This is a nursery! I'm not a baby!' (7)

iv 引用ページ数は下記の本のページ数を表している。A. Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden,* Harper Trophy, 1992.

v excitedly anticipating something: excitedly aware that something is about to happen.

vi Nothing... Only this: a great lawn where flower-beds bloomed; a towering fir-tree, and thick, beetle-browed yews that humped their shapes down two sides of the lawn; on the third side, to the right, a greenhouse almost the size of a real house; from each corner of the lawn, a path that twisted away to some other depths of garden, with other trees. (19-20)

vii She was dreaming of the scenes of her childhood. (35)

viii 山下圭一郎　篇『イメージ・シンボル事典』、大修館、1996年、第20版。272-273ページ。

ix Tom noticed that she spoke to him as if he were a child and she were not. (145)

x She doesn't want to grow up; she wants only her garden. (142)

xi 223 I forgot the fir-tree, and the garden, and you, too, Tom, because this was my wedding day.

xii Cf. J. Hillis Miller, "Narrative," *Critical Terms for Literary Study,* 1995. p.71.
Vladimir Propp's influential Morphology of the Folk Tale, for example, one of the classics of Slavic formalism, attempts to demonstrate that one hundred Russian folk tales are all variants of the same structural form.

xiii 安藤聡は「半世紀以上未来からトムがこの庭にきた」としている。Cf. 安藤聡.『ファンタジーと歴史的危機』彩流社. 206頁.
1895年のひどく寒かった冬の翌年にハティーが結婚している。『トムは真夜中の庭で』が1958年に出版されたことを考えると、トムが現実にバーソロミュー夫人に出会ったときに、彼女は80歳前後と考えられよう。

xiv ヨハネの黙示録（ヨハネのもくしろく）は新約聖書の最終部に収められている書であり、新約聖書の中では唯一預言書的性格を持つものである。黙示（Revelation）とはギリシャ語の「アポカリュプス」（Αποκάλυψις）の訳で、原義は「覆いを取る」すなわち「隠されていたものが明らかにされる」という意味である。この書は一般的に、ヨハネという名の

人が啓示を受け、その啓示によって書かれた預言の書とみなされている。

xv 66:010:001 And I saw another mighty angel come down from heaven, clothed with a cloud: and a rainbow was upon his head, and his face was as it were the sun, and his feet as pillars of fire:
66:010:002 And he had in his hand a little book open: and he set his right foot upon the sea, and his left foot on the earth,
66:010:003 And cried with a loud voice, as when a lion roareth: and when he had cried, seven thunders uttered their voices.
66:010:004 And when the seven thunders had uttered their voices, I was about to write: and I heard a voice from heaven saying unto me, Seal up those things which the seven thunders uttered, and write them not.
66:010:005 And the angel which I saw stand upon the sea and upon the earth lifted up his hand to heaven,
66:010:006 And sware by him that liveth for ever and ever, who created heaven, and the things that therein are, and the earth, and the things that therein are, and the sea, and the things which are therein, that there should be time no longer:

xvi *Webster's Third New International Dictionary.*